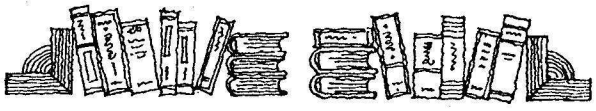
日本女子大学

# 国語国文学会だより



No.9　1993.7

国文学科卒業生の会

## 国語国文学会 春の総会・研究発表会報告

平成五年度春の総会・研究発表会が、五月二十七日（木）、香雪館四〇一番教室において開催されました。

◆開会の辞
国語国文学会会長　阿蘇瑞枝先生

◆第一部　総会
(1) 奨学金授与
久松潜一賞奨学金　二名
上村悦子賞奨学金　二名
(2) 国語国文学会委員長挨拶および役員紹介（在学生の会・卒業生の会）
(3) 平成四年度活動報告・会計報告
(4) 平成五年度活動計画・予算案
(3)(4)については在学生・卒業生よりそれぞれ報告、説明があり、各案件とも審議、承認されました。なお今年度の活動計画は、従来の活動に加え、会員の増加、学会活動のいっそうの活性化をはかるとともに、会員名簿を整備することを目標としております。
(5) 自主ゼミ紹介・報告

◆第二部　研究発表会
(1)『平家物語』―その死の諸相
新制四十三回生　斉藤直子氏
(2) 芥川龍之介『舞踏会』―海軍将校の視座をめぐって
大学院博士課程後期三年　溝部優実子氏
(3) 対話資料における「話段」の展開
大学院博士課程前期二年　鈴木香子氏

いずれも充実した内容をもつ発表であり、活発な質疑応答が行われました。

### 秋季大会・公開講演会のご案内

秋季大会・公開講演会は，平成5年11月27日（土）開催の予定です。

講演者は本学客員教授ドナルド・キーン先生，本学教授石綿敏雄先生に内定しています。

研究発表会は午前10時～12時，桜楓会館の予定。

発表ご希望の方は，9月末日迄に，題目・氏名・回生・電話番号を明記の上，800字程度の要旨を添えて，下記までお申し込み下さい。

〒112 文京区目白台2－8－1
日本女子大学国文学科研究室内
国語国文学会　卒業生の会　大会係

# 日本女子大学国語国文学会 会計報告

（平成四年度卒業生会員関係決算報告 1993, 3, 31 現在）

| 【収入の部】 | | 予算額 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 817,908 | 817,908 |
| 会費 | 517,500 | 500,000 |
| 利子 | 19,468 | |
| 小計 | 1,354,876 | |
| 【支出の部】 | | |
| 通信費（切手・はがき・他） | 139,168 | 200,000 |
| 文具費（封筒・シール・他） | 6,672 | 20,000 |
| コピー代 | 10,877 | 10,000 |
| 名簿整理費（桜楓会名簿代） | 4,635 | 20,000 |
| 会報印刷費 | 63,600 | 200,000 |
| 委員会会合費 | 3,490 | 15,000 |
| ゼミ費（四ゼミ） | 40,000 | 60,000 |
| 講演会費 | 30,000 | 50,000 |
| 新会員へのPR費（会報150部・封筒） | 3,627 | 30,000 |
| 発会準備金返済費（三回目） | 100,000 | 100,000 |
| 予備費（弔電） | 2,585 | 612,908 |
| 小計 | 404,654 | |
| 繰越金 | 950,222（名簿作成費分含む） | |

上記の通り決算報告致します。

会計

田中基子　山本玲子　安東佳代子

監査の結果、上記決算報告が正確であることを認めます。

監査

荻窪昭子

（平成五年度卒業生会員関係予算案）

| 【収入の部】 | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 950,222 |
| 会費 | 500,000 |
| 小計 | 1,450,222 |
| 【支出の部】 | |
| 通信費 | 200,000 |
| 文具費 | 20,000 |
| コピー代 | 20,000 |
| 名簿整理費（用紙代・ワープロ購入費） | 40,000 |
| 名簿印刷代 | 200,000 |
| 名簿発送費 | 140,000 |
| 会報印刷費 | 100,000 |
| 委員会会合費（活動費・他） | 40,000 |
| ゼミ費 | 60,000 |
| 講演会費 | 50,000 |
| 新会員PR費 | 20,000 |
| 発会準備金返済金 | 100,000 |
| 慶弔費（電報） | 10,000 |
| 予備費 | 450,222 |
| 小計 | 1,450,222 |

# 平成五年度 研究サークル

○平安文学談話会
金曜日　午後五時半または土曜午後二時（年四回）
国文学科資料室四二六
平安文学に関する研究発表後、談話会
・連絡先　高野晴代　電話 〇三（三三七〇）六六〇六

○皇女研究会
毎月第二土曜日　午前十時半
大学図書館共同研究室
皇女総覧平安朝篇の作成
・連絡先 柳澤理恵子 電話 〇四五（八四一）六五二五 楠木方

○古代中世文化論
毎月第四月曜日　午後一時半
国文学科資料室四二六
「作庭記」の輪読、能楽鑑賞等も行う
・連絡先　山田佐和子　電話 〇三（三九七二）四八四三

○中島斌雄先生の俳句を読みながら
毎月第三土曜日　午後二時
中島斌雄先生宅
第二句集「光炎」の鑑賞・批評
・連絡先　綾野道江　電話 〇四四（九六六〇）五四二五

○卒業生の文学活動の跡をたどる―国文学科卒業生を中心に―
土曜日　午後二時（年四回）
国文学科資料室四二六
『青踏』創刊頃の編集者について
・連絡先　斎藤令子　電話 〇三（三七八一）六三八〇

○能楽研究会（本年度休会）

参加ご希望の方は、各サークル代表者に随時お申し込み下さい。

国語国文学会だより No.9

## 秋季大会　公開講演会　報告

平成四年十一月二十八日（土）八十年館八五一教室において、国語国文学会秋季大会・公開講演会を開催しました。

活動報告に続いての研究発表では、九月に亡くなられた井上百合子先生のご研究の方法について、「井上百合子先生と漱石文学、および夏目漱石」と題して石崎公子氏から、また中島斌雄先生関連著書の出版を記念し、「中島斌雄先生の俳句」と題して綾野道江氏から、それぞれ先生方の在りし日のご様子を髣髴とさせる細緻でご熱心な報告がありました。

次に「東と西の演劇」として本学助教授源五郎氏が講演をなさいました。先生の一年間にわたるヨーロッパ諸国での演劇のご研究をふまえて、ヨーロッパと日本の相違――それは考え方の相違でもある点をわかりやすく話してくださいました。また、脚本家大石静氏よりは「表現の仕事――テレビドラマづくりを通して――」と題し、現代のテレビという特有のメディアを使って表現することの本質について、エピソードをふんだんに取り入れた興味深い講演がありました。

懐かしい恩師のご研究、作品紹介という研究発表、演劇に関わる講演、とテーマ性のある大会は盛会のうちに終了。引き続き生協食堂で、大石静氏、先生方、学生、卒業生が大勢参加、和やかに懇親会を開きました。

（総務）

## 研究発表

＊当日の発表の順に掲載させていただきます

### 井上百合子先生と漱石文学、および夏目漱石

東京家政学院大学助教授　石崎公子

井上百合子先生の追悼ということでこの発表が企画されたと伺っておりますが、研究者の研究についての研究発表は多分なされたことがないと思います。ですから、研究発表というよりは、井上先生の漱石研究の紹介ということで、三点にしぼってお話をさせていただきます。

一つは、先生の研究方法についてです。先生のご著書の中に、漱石の作品はその時代の集合意識の産物である、従って時代と切り離して作品を読むということはおかしいのではないか、という主張があります。先生は、絶えず作品論と作家論の往復ということを考えておいでした。作家を通じて作品は時代と結びついている、いつも小説の生きた時代の中に漱石の作品を置いてみることを、非常に厳しくご自分に課しておいでした。

二つめは、イギリス文学と漱石の関係についてです。幼い頃から漢文、中国文学で教育を受けた漱石が、中国文学を理解できたようにはイギリス文学が理解できず、ショックを受けたことは有名ですが、悩んだ挙句、日本人としての立場、感性で鑑賞することを信じる立場をとるようになった、この鑑賞の主体性ということを漱石の自己本位は指しているのではないか、と先生は強調されています。漱石が単に西洋の文学を捨てて伝統に回帰するタイプの人ではなく、行きつ戻りつ、西と東の文学の対立を乗り越えて統一、調和することを考えていたと、『草枕』『明暗』をあげて例証しておられます。

三つめは、倫理性の問題についてです。先生は、『こころ』こそは漱石の倫理観の頂点であり、『明暗』では、人間の倫理は社会への倫理に発展していくはずではなかったかと、おっしゃっています。人間が生きていく上で、必ず求めざるを得ない倫理、それを漱石は追求していたのではないかと、考えておいでした。

先生は葬儀一切を行わないよう遺言されました。学生の指導のためには、他に対することには、惜しみなくその財力をお使いになりながら、そのご生活は簡素なものでもありました。

先生にとって漱石は単なる研究の対象ではなく、虚礼を嫌った漱石の反俗精神、真の意味の自己本位、そうした漱石の精神を受け継ぐという形で先生はご自分の生涯を律していらしたのではないかという気がいたしまして、研究者としての生きる姿勢を先生から厳しく諭されたような気がしております。

## 中島斌雄先生の俳句

日本女子大学附属高校教諭
俳誌『麦』同人
綾野道江

中島斌雄先生は三つの顔をお持ちでした。一つは日本女子大学の教授、一つは芭蕉の、俳諧の研究者、もう一つの顔が、俳人・中島斌雄です。先生は十三歳、中学の頃から俳句を作られ、昭和六十三年三月四日、七十九歳で亡くなられるまで、四千数百句を残されました。

句集は処女句集『樹氷群』、『光炎』『火口壁』『わが噴煙』『肉声』、そして最後の句集には自ら『牛後』と題名を付けておいでですが、この題名からも、先生の姿勢をお感じになるのではないかと思います。

先生が終生追い求められたのは、新しいということです。新しみに対する強烈な意志があるということは、現在に安住しえないことでもあります。俳句というものは、為す努力があって初めて成るものです。しかもそこにあるものは、昨日の己ではない、さらに新しい強靱な意志を持つもの、そこに生みだされたものが、斌雄俳句の本来の姿ではないかと思います。

『樹氷群』は昭和十六年に刊行されました。先生三十三歳の年で、巻頭には、

初暦イエスパウロの道(ことば)あり

日本的な初暦という季語に、イエスパウロという西洋的なもの、つまり東洋的なものと西洋的なものを併せた初々しい知性的な句で、斌雄俳句の将来を予見させる作であります。

第二句集『光炎』には、女子大に関する句がいくつかあります。

校後の冬日ものおもうごとピアノ韻る
光り散る教へ子ら冬木光り立つ

また、代表作の一部をあげるならば、

裂け目より柘榴真二つ汝と分たん
春千潟生くるものみな砂色に
（『光炎』）

塵労の胸より雲雀鳴きのぼる
雲秋意琴を売らんと横抱きに
（『火口壁』）

春愁や無数の鳥と沖に逢い
爆音や乾きて剛き麦の禾
（『わが噴煙』）

老年が指の尖まで鶴わたる
鱒となり夜明け身を透く水となり
（『肉声』）

先生最後の句は、『牛後』の

エビネラン瀟酒に老いて歩み去り
エビネラン人それぞれに別れあり

を含むエビネランの七句連作です。

起承転結と申しますが、起承転と進んで、結がなく、常に新しみを求めてその信条を貫いたのが斌雄俳句の世界ではないかと思います。中島斌雄の俳句は、リズムに緩みがなく凛々しく立っている句です。先生は、現代俳句にとって希有の存在でありながら、その存在が知られること少ないもどかしさを感じます。先生の愛された日本女子大学の中で、先生の句がもっと多くの方々にお読みいただければと思います。

# 講演

## 東と西の演劇

国文学科助教授
源五郎

一年間、研修でロンドンに行き、英語の勉強をしながら、色々な芝居をみてきました。清水邦夫の安保闘争を背景に、記憶を喪失した男を描いた「タンゴ冬の終りに ――」も、見ました。英語版で向こうの役者が、台詞は英語で風俗は日本のものを演るという芝居で、有名な蜷川幸雄の演出、朝倉摂の装置、世界的な照明家吉井澄雄の照明で、アラン・リックマンというイギリスで一番売れている俳優が主役で、日本側からは期待されていたようですが、やはりイギリス人にはわからないようでした。東西の演劇の違い、翻訳のむずかしさを感じました。

そこで、男性と女性の問題、フェミニズムの問題、端的に言いますと裸ということと洋服を着るということは、演劇上、どういう意味があるのかということをちょっと考えてみましょう。シェークスピアの頃はともかく、近代演劇はリアルな演劇表現を求め、男の役は男が、女の役は女が演る、これが大前提になっています。ところが、日本には歌舞伎があり、独特な女形が存在します。出雲の阿国は舞台に立っておりましたが、当時の政策が演劇に反映され、そうした制約の中から、男性が女性をより女性

らしく演じるという伝統を創り上げてきたわけです。

イギリスで見た芝居でおもしろかったのは、クロスジェンダーというキャスティングです。さっき裸と申しましたが、歌舞伎で女形が裸で女を演じたのでは、男とわかってしまいます。女形が女になるためには着物を着なくてはなりません。クロスジェンダーでは男性が女の格好をして女性を、女性が男性の格好をして男性を演じます。なぜ、男も女もいるのに、元々それらしくあるのを逆にして、演じなくてはならないかという問題が、そこに出てきます。

私が見たのは、「クラウドナイン」という作品で、第一幕はビクトリア朝時代。アフリカの植民地、そこを支配している一家の物語ですが、奥さんのベティを男性が演じ、「私ども女は男性によって作り出されたもの、殿方のお気に召す女になりたいと思っております」という自己紹介をします。男が女を作っているんだという当時のリアルな思想・認識が、そのまま舞台に登場するためには、どうしたらいいのか。

この芝居を日本でやるとどうなるか。日本は歌舞伎の伝統があります。ですから、どんな若い役者も上手に女になってしまいますし、私たちも当たり前に見ています。しかし、女形の歴史がない国の人が見れば、とても変に見えるのです。二つの意味で、問題がここにあります。イギリスやヨーロッパでは、仮に女性の役を男性が演じたら、実に奇妙なものになる、抵抗感が生じるのですが、実は我々にないのです。

私は、日本での上演をいくつか見たんですが、やっぱりダメなんです。つまり、歌舞伎が持っているリアリズムの精神で、このクロスジェンダーキャスティングを上演してしまうんです。ベティという女主人公を、男優がきれいに不自然ではなく演じます。しかし、不自然でないのは、作者・キャリル・チャーチルから見ると失敗です。作者は、女性の役を男性が演じることで、女性というものを男性が作っているのだから、その作り手の主体が女性を演じるという交錯した形で、キャスティングを考えているのです。それは誰が見ても奇妙だ、という具合に感じないと、この作品は意味を持ちません。ところが、我々は女形の歴史を持つために、作品の持っている独創性を、その作品から読み取れないのです。

この作品は劇場や演劇に関係する色々な人が集まって、それぞれ自分の体験を話し合うというところから生まれてきました。よく見ていくと、男だけのことと思っていたことが、女でも普通にあったり、女の思っているようなことが、男にも普通にあったりすることに、みんな気がついたんです。

私たちは芝居としては当たり前に、しかし第三者としては、女性を男性が演じるのは変だという認識を持っているわけですが、実はそれを変だと思うその認識自体が実は変なんだ、ということです。これは、歌舞伎の国とヨーロッパの国と、ヨーロッパの演劇と非常に違う点ではないかと思う次第です。

## 表現の仕事
### ―― テレビドラマづくりを通して ――

脚本家　大石　静

テレビドラマについてその特質と私が何をその中でやりたいと考えているかについて、お話ししてみます。演劇は生であり、映画とテレビの違いは、映画は劇場という日常生活とは全く違う暗い空間で、料金を払い、出掛けていって見るものであり、テレビは日常空間の中に置かれ、生活の中で、炊事をしながら入浴しながら見るものといえます。見にいかなくても流れてくるもの、拒否したければその場で拒否できるもの、それがテレビであるともいえます。

映画の場合、戦争の一場面を見ても、劇場の外へ出れば、これが私の現実だという世界があります。テレビの画面はすっと家庭に入り込んで、日常生活とテレビ画面が一本化してしまうものです。しかし、私たち作り手にとって、ドラマは日常の延長として提供しているわけではありません。現実の一場面を身構えて捉えて創作し、提供しているので、受け手の日常性とのギャップがむずかしいところだと思います。私はテレビの作り手ですが、よくテレビを見ますので、受け手でもあります。先年、父を亡くしましたが、その前後は重いドラマなどは見る気がしない、明るいバラエティなどが励みになりました。受け手の日常は刻々変化します、そう

した多くの人たちに向かって、作り手は日常的ではない条件の中でドラマを作っている、そこがむずかしいところだと思います。そのむずかしさの中で、私はやはり自分にこだわったり、抵抗したりしています。

## ―― テレビドラマのむずかしさ ――

エッセイを書くようになりまして、脚本を書くむずかしさを改めて感じました。エッセイは自分の言葉で書くことができますが、脚本はすべてしゃべり言葉で、私とは違うキャラクターの人物のセリフを、老若男女問わずに書かなければいけません。また、予算の枠もあります。二時間単発のスペシャルで最高一億円、一時間の連続ドラマの一本分は三千五百万から五千万円までで制作されています。失恋した女主人公が外国へ傷心旅行に行く ―― という設定は、予算が関係してきます。また、テレビの特質としてスポンサーの問題があります。お酒のスポンサーの場合、飲みすぎて失敗するのは厳禁、車のスポンサーで車の事故はご法度です。

エッセイや小説は一人の仕事ですが、テレビの仕事は演出家、俳優、その他多くのスタッフの手を経て創り上げられるという特色があります。私の場合、脚本の依頼を受けるとき、主演級の俳優はおおむね決まっています。三か月・十三回のドラマですと、私自身に問題意識がないと、続きません。私はもうあまり若くないので、中年の人物の方が、やはり私の関心は強くなります。

## ――『バンサンカン・結婚』の場合 ――

私は幼稚園から女子大でしたので、どちらかというと保守的な生活を送っておりました。高校生の頃、学生運動が盛んで、学生と機動隊のにらみ合うさまを見ており、家がお茶の水でしたので、雨戸をしめないと家中催涙弾の煙が充満するような日々で、ノンポリの私でさえ、何か考えなければいけない、という切迫感がありました。そしてある日、私は庭に逃げ込んできた学生を部屋にかくまうという、日本女子大の学生としては貴重な経験も持っています。翌日、私の部屋にかけてあったピンクのカーテンを「こんなカーテンをかけるな」と非難して、礼一つ言わず出ていった学生も今、中年です。

私は挫折し、その痛みをもって生きる中年男性と二十五歳の女性の恋愛関係を通して、その男性の心理を書きたいと思ったのですが、プロデューサーから当時の学生運動はもはやわかりにくい、と反対されました。結局、かつての闘士も広告代理店という資本主義の最先端で開き直って生きている中年男性とし、せめてその男性が登場する場面にはバックミュージックとして当時流行していたボブ・デュランの曲を流すことで、私の心の折り合いをつけました。

第二に、私はドラマの性の描写がどうしても甘美に流れすぎていると思っていました。ヒロイン安田成美が中年の男性との関わりを通して心と体の解放を知り、その男性と別れて新しい若い男性と出会ったとき、どういう影を心と体に落とすか、つっこんで書いてみたいと思いました。もう一人のヒロイン菊池桃子は、今までのキャラクターと違って毒のある女性にしました。名は右子、一流好み、結婚相手は三高の男性、その右子が価値観を変えていくさまを書きました。菊池桃子も今までにないキャラクターを見せ、右子現象といわれたほど評判になり、このドラマでの私の唯一の成功となりました。

第一、第二のテーマは失敗しました。中年男性役は〝具が大きい〟の小林捻侍、若い男性は医師役で石黒賢。性の描写も私が余りこだわるので、二通りのシーンをとってくれたのですが、撮影に立会い、よいと思ったシリアスなほうが、家にビデオをもらって帰り茶の間で見ると、そのシーンだけ突出してしまい、日常空間の中では何やら気恥ずかしく、見ていられません。テレビとは結局こういうものかと思いました。やりたいことを実験的にやってみて、テレビの日常性、その中で私はこれからどう関わっていくか、シビアに見つめ直すよい機会になり、また、ドラマも年間視聴率のベスト5に入ることができて、よかったと思っています。

最近、このお茶の間の空間を日常的ではないものにしてしまうドラマも出てきています。日常性も大切にしつつ、一方で視聴者が自分自身の置かれている位置を疑ってみるようなドラマも書いていけたらと思います。

テレビは私のおもちゃであり、私のペンであり、私の剣でもあることを、考えていきたいと思っています。

一九九三年七月十五日　発行・日本女子大学　国語国文学会　卒業生の会

# 井上百合子 亀山健吉 両教授退官記念号 目次（国文目白三十一号）


日本女子大学と私 …… 井上百合子 （一）
「忘れ得ぬ書物あれこれ」 …… 亀山健吉 （五）
井上百合子先生略歴ならびに著書・論文等業績一覧 …… （二〇）
亀山健吉先生略歴ならびに著書・論文等業績一覧 …… （二七）
娘と母 …… 岩淵宏子 （三一）
――『伸子』もう一つのテクスト――
尾崎紅葉小論 …… 木谷喜美枝 （四四）
――『我楽多文庫』における批評精神――
【当世少年気質】考 …… 久米依子 （五四）
――明治少年の〈ことば〉――
「それから」における母の不在について …… 岡本文子 （六四）
都市の感性 …… 三上公子 （七四）
――『三四郎』試論――
正宗白鳥の翻案児童文学 …… 大本泉 （八二）
――処女出版『ふしぎの魚』の紹介――
芥川龍之介と東京 …… 神田由美子 （九八）
岸田国士の演劇論 …… 鈴木夫佐子 （一〇八）
金子光晴その自叙伝の試み …… 森慶子 （一一六）
大岡昇平【俘虜記】 …… 花崎育代 （一二二）
――〈忿怖〉と呼びたくない情念――
三木卓詩集【東京午前三時】試論 …… 二木晴美 （一三二）
創作
たんぽぽ色のリボン …… 安房直子 （一四二）
明治初頭の一現象 …… 浅野三平 （一五〇）
――『安愚楽鍋』の背景――
「いとまなみ」をめぐって …… 浅野則子 （一五八）
――大伴坂上郎女一四九八番歌を考える――
夕顔 巻四首の和歌について …… 海原千里 （一六八）
長保年間の公任 …… 杉田まゆ子 （一七九）
――『公任集』における公任と道長――
中世における神功皇后像の展開 …… 多田圭子 （一九一）
――縁起から『太平記』へ――
【門】試論 …… 田中愛 （二〇四）
――アイロニーを中心に――
【夢十夜】「第一夜」私論 …… 田中美穂 （二一二）
――『永日小品』『心』との比較を交えて――
「それから」 …… 藤木直美 （二二一）
――〈自然の愛〉のゆくえ――
宮沢賢治「ひかりの素足」試論 …… 山根知子 （二三一）
――意識の深層をめぐって――
【歯車】試論 …… 溝部優実子 （二四〇）
――「僕」の現実世界をめぐって――
擬音語・擬態語と形式動詞「する」の結合について …… 中北美千子 （二四七）
元輔集注釈余滴 …… 後藤祥子・八木京子 （二五七）
――「ともとき」・「腹赤（はらか）」について――
〔書評・紹介〕
上村悦子著【蜻蛉日記解釈大成 6】 …… 後藤祥子 （二六九）
木藤才蔵著【ささめごとの研究】 …… 麻原美子 （二七〇）
長谷川幸子句歌集【かにひの花 青き石】 …… 後藤祥子 （二七二）
〔彙報〕


# 井上百合子名誉教授追悼号 目次（国文目白三十二号）


井上百合子教授追悼記 …… 青木生子 （一）
井上百合子先生をお偲びして …… 長谷川泉
漱石的女人 …… 平岡敏夫
井上百合子氏を思う …… 熊坂敦子
残せし言葉花となる …… みなもとごろう
豊かな髪の記憶 …… 木谷喜美枝
桃色の頬 …… 倉田（岩淵）宏子
含羞の先生の〈道楽〉 …… 久米依子
井上先生――はるかに高い梢 …… 斎藤令子
あの微笑よ永久に …… 田邊園子
思い出の原稿 …… 白石美鈴 （一一七）
【連歌至宝抄】の本意について …… 佐久間まゆみ （一三一）
女子学生の日常談話の接続表現 …… 鈴木香子 （一四九）
「荘子」「胡蝶の夢」小考 …… 谷中信一
――荘周はなぜ胡蝶になった夢を見たか――
日並皇子挽歌の推敲過程 …… 八木京子 （一六〇）
――統一的主題をめぐって――
歌人 和泉式部考 …… 大熊祥子 （一七一）
――その歌語意識をめぐって――
紫式部と「ものづつみ」について …… 田邊玲子 （一八三）
平重衡論 …… 大木玲子 （一九四）
――「あひ思ふことなき公達」から「仏敵」への変貌――
【三四郎】 …… 五十嵐礼子 （二〇三）
――ホイッスラーとの関連を中心に――
【こころ】 …… 川嶋葉子 （二一二）
――「明治の精神」をめぐって――
「道草」 …… 菊原昌子 （二一九）
――求愛のサイン――
島村抱月の浅草体験 …… 小竹智子 （二二八）
――〈新喜劇普及興行〉の意味と位置――
「少将滋幹の母」試論 …… 有元直子 （二三七）
「夏の間」論 …… 長島桂子 （二四七）
――〈剥離〉の感覚と都市空間――
形容詞・形容動詞と形式動詞「する」の結合について …… 中北美千子 （二五八）
自・他の対応と日中対照研究 …… 中島悦子 （二六四）
――自動化――
〔書評〕 …… （二七二）
阿蘇瑞枝著【万葉和歌史論考】／井上百合子著【夏目漱石とその周辺】
小島千加子著【作家の風景】／田邊園子著【女の夢 男の夢】
〔彙報〕 …… （二八〇）


※申し込み 〒112 東京都文京区目白台二―八―一 （葉書にて） 国文学科研究室『国文目白』係

※冊子代金は、冊子到着後に払い込んでください。三十一号が千五百円、三十二号が千百円です。（送料共）

## 「井上百合子先生を偲ぶ会」開催される

平成五年三月四日、「井上百合子先生を偲ぶ会」が桜楓会新館で開かれました。昨年九月十九日逝去され、ご遺志により葬儀を行われなかった先生にお別れを告げようと、研究室が中心となり、有志主催で行われたものです。

木谷喜美枝氏（和洋女子大学教授）、倉田宏子助教授の司会により、麻原美子教授の趣旨説明、後藤祥子教授の略歴・業績の紹介、参加者全員黙祷のあと、青木生子学長、熊坂敦子教授、源五郎助教授の追悼のことば、同級生、教え子による思い出話など、日本女子大学を、学生を愛した先生のエピソードが紹介され、改めて、在りし日の先生を懐かしくお偲びしました。

参加者それぞれの胸に、それぞれのすがやかな別れを告げられるように、白百合に囲まれた先生の遺影は、あの温顔をたたえていました。

## 研究室だより

○新年度がはじまって、早くも三ヶ月経過しようとしています。

○本年度から、学年暦が変更になって、前期試験終了後に、夏休暇を迎えることになりました。

○本年度の国文学科の専任の先生方は、昨年と変りありません。

後藤祥子先生（中古文学）
麻原美子先生（中世文学）
浅野三平先生（近世文学）
熊坂敦子先生（近代文学）
倉田宏子先生（近代文学）
源　五郎先生（近代文学）
石綿敏雄先生（日本語学）
佐久間まゆみ先生（日本語学）
清水康行先生（日本語学）
谷中信一先生（中国思想史）
阿蘇瑞枝（上代文学）の十一名です。研究室の運営や学生のお世話をして下さっている助手さんは昨年同様、白石美鈴さん、桂千佳子さん、植田恭代さんの三名です。

○桂さんは、旧姓中嶋さんで、昨年の秋に結婚なさって姓が変りました。お幸せそうです。

○非常勤の助手さんは、松沼敦子さんに替わって、四月から、田中愛さんが勤務しておいでです。

皆さんお元気で、いきいきとしていらっしゃいます。

（阿蘇記）

## 「青木生子先生に感謝する会」開催される

さる六月五日夕刻、この春任期満了で学長職を退かれた青木先生に感謝する会が、目白椿山荘で行われました。先生はそのご功績により、この春の叙勲で勲三等宝冠章をお受けになりましたが、この度の会はその祝意や長期にわたるご大任へのご慰労を籠めつつも、その趣旨は学生気分を蘇らせての感謝の会となりました。当日の出席者は五百余名。各回生毎に丸いテーブルを囲み、しばしのクラス会気分も味わった和やかな会でした。会はまず浅野三平先生の開会の辞で幕をあけ、熊坂敦子先生によるご略歴紹介、新学長宮本美紗子先生をはじめ来賓の辞に続いて、記念品贈呈、花束贈呈が行われ、青木先生のご挨拶があって第一部を終えました。

第二部は国文学科らしく、卒業生による能（富山礼子師）狂言（和泉淳子師姉弟）が花を添え、先生のご学友の三枝佐枝子氏、後輩を代表しての平岩弓枝氏、教え子代表の壬生幸子氏のスピーチ、校歌斉唱の後、阿蘇瑞枝主任の閉会の辞で宴は九時頃お開きとなりましたが、興奮醒めやらず、先生を囲んでのロビーの歓談はいつまでも続きました。

（後藤記）

## 恩師をたずねて

### 限りなき古典への情熱・上村悦子名誉教授

上村悦子名誉教授 ― 懐かしい先生。お教えを受けた卒業生も多い。先生はいま、『蜻蛉日記解釈大成』第八巻（全九巻明治書院）の校正にお元気に取り組んでおられる。年内発行の予定で、昭和五十八年第一巻が発行されてから十二年、来年には九巻を発行、大著も完成される。

しかし、先生の夢は、まだまだ限りなく広がる。『蜻蛉日記』研究の第一人者として、次には『蜻蛉日記』の文学論の執筆を計画中で、論文を書きつづけておられる。読むうちに次々と分からなかったところが見えてくる、『蜻蛉日記』があってこそ『源氏物語』が誕生したと、先生のお話は、熱っぽく、お声は若々しい。

もうひとつの先生の夢は古典の普及。敬遠されがちな古典を面白く、身近に感じとってもらいたいと、月一回古典を読む会を開いて三十年余になる。『万葉集』、『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、そして『枕草子』へと先生を囲む輪は、和やかに進んでいる。

「年齢は聞くものでも、いうものでもない」とおっしゃる先生のこの若々しさの秘訣は、毎日のたゆみない努力。朝四時三十分起床、般若心経をあげたあと、ラジオで高校講座に取り組み、ラジオ体操、階段を使ってのリハビリ。食後は十時から十二時論文の執筆、入浴のない火・水・木は午後も執筆。五時の食事のあとは、朝と同じ階段を使ってのリハビリ、目をかばって夜は読書はせず、好きな万葉集の歌、源氏物語の一節を口ずさむなど、頭の体操を欠かさない。

「去りし今いよいよ希ひぬ学び舎の国文学科の大き栄を」―― 女子大退職の時詠まれたこの思いは今も変わらない。

その思いを託す上村悦子賞が今年も春の総会で、大学院生に贈呈された。そして、八十五歳、今も学問の追求に情熱を傾ける上村先生の日々は、国文学科に学ぶ者、学んだ者への力強いメッセージでもある。

（斎藤記）

一九九三年七月一五日
発行・日本女子大学
国語国文学会卒業生の会

※振替用紙を同封致しました。
会費納入をよろしくお願いいたします。